西大寺蔵本 護摩蜜記 長元八年訓點の訓讀文

小林芳規

一 訓讀文
二 解説
附 假名字體表・ヲコト點圖

一 訓讀文

原文の假名は片假名で、ヲコト點は平假名であらわし括弧は私に補って訓んだことを示す。）はヲコト點の記號が一つであることを「の」は句點を、「、」は讀點を示す。「」は不讀文字であり、【】は割注の文章である。

①中央に朱点あれど抹消す
②「色」の中央に朱点あり。四墓点の「ア」に相当する
③「絲」の左上角に朱点あり

「護摩蜜記

鑪・爐を修飾して橛を以て四角に立て（て）よ。【削木を以て結ヒ副へ「イヲ」て、行者の前の面の左右の二の橛に八。擧（げ）て五色の絲を曳（か）むか爲なり【也】。】ヲ、曳キ繫へ。【須く四面に均一等に之を曳くべキナリ。而（る）を行者の辦事之方面をハ擧（げ）て、削木に「イヲ」着けて之を亘シて所作の雜事絲の上を用（ゐる）可（から）不るか「之」故なり【也】。】

真言 唵セ訶羅々々・滿駄弥・束訖羅駄羅尼・悉駄里・智莎訶

壇の下の四角に燈臺八本を立て燈を燃セ「イセ」【通一途に必ミモ「イしも」八

本を用ゐ(1)不るか歟。四本は(2)便に隨て之を用ゐよ。香花八供。(3)例に依て辨ー備せよ。若し日中の一時には飲食供有らば[者]。菓子餅羹飯各二杯、[其の餅の阿ー礼[イは]調伏には黒色なり。即ち烏胡麻を用ゐよ。息災には白色なり。粉ー白を用ゐよ。餘の法に別ー色有り[イと]雖とも。尚を白を用ゐよ。清浄ー馨香ー美にして疎ー忽を得ず。蘇蜜を一器に和合して蓋を覆ふて壇の東北の角に置け。息災の(5)時の方なり[也]。息災の餘は准して知(ん)ぬ可し。時毎に承ー仕えを取て行者の前に置け。別器に分ち取て之を用ゐよ。本ー器は常に本ー所に置け。礼盤の左の机に香水二器を置け。一器は瀬口なり、一器は灑浄なり。其の灑浄の器の上には散ー杖有らせ[也]。大乳木一束、[員百八枚なり。小乳木八把、[夕(把)別に七枚なり。

(1)「不」の左傍に西墓点では「ず」のヨコト点あれど抹消
(2)「ば」のヨ上点薄し
(3)「例」朱で左傍に加ふ
(4)訓と音とを併記せり
(5)「時」右中に朱上点あれど抹消

相ー應一物一杯蓋を覆ふて輙すく人をして之を見せ令め不れ。[天ー狐形・地狐形・人形・各七枚。麺ヲ[イを]以て之を作れ。[名香は[燒香に加(ふ)る料なり。雑花[五種の護摩に色毎の[之]花有り[と]雖も。(3)通途に、只調伏には阿世美。餘の法には[之]支美を用(ゐ)る歟。屈蔓草、[是れ息災の[之]時に延命の為なり[也]。(4)自餘は用(ゐ)る可からずと。塗香[行者の所ー須なり。香爐等也

礼盤の右の机に陳ー列セヨ[イして]油熟五穀[堅粥[五穀飯塩等各一杯を[イに]生(す)。[塩は小器に盛れ。自ー餘の物は叩ー戸の如くあるいは物に盛れて。若し調伏の法なら者加を置く可し。稲穀鐵末を毒ー春[芥子胡麻稷米各一杯。丸香末香各一果つみ。[法に隨ての相應の[之]香半丸半末ヲモテス[イをもて]せよ]大小の杓各一

(1)(2)「獨」の作を朱にて正せり欄外下「狐」とあり
(3)この上「之花」二字を朱丸にて消せり
(4)「自」右中に朱点あり西墓点にては「シ」。たゞし薄し
(5)「半」を朱にて正せり

柄・【横に油器の上に置け【也】。】扇・火著等・外に香水一器。燒香一器、。之を便所に置け。【謂はく堂の戸の邊に行者の便ち越へる【之】處なり。蓋し身を浄して堂に入りて仏に向行者礼盤の前に到て二度礼拝して懺謝の頌を唱へて曰はく。【若し普礼の真言を誦す可き歟。】普礼の真言者・作礼方便の真言也。

(1)浄身の失(失)点あり、行か(ひ)マツル【イたてまつる】【之】意歟。

我從過去世　流轉於生死　今對大聖尊　盡心而懺悔　如前仏所懺　我今亦如是　願垂加持力　衆生悉清浄　以此大願故　自他獲名垢

座に着て若つ壇供等を點檢せよ【イス】。此の間に護摩の物を以て油器并に花燈閼伽等に入れよ。【怠緩には胡麻を用ゐよ。調伏には芥子。増益粳米。敬愛鉤召は【イハ】増益に同し。此の事人をして知らしめず【不】して只小分を捻【イし】て密々に之を入れよ。】次に杵珠等を置け【杵は鈴の前に置け。珠は便所に在け。】次に塗香を用ゐよ。次に三部護身　次に名香を取りて燒香の上に加へよ。【前の方の一の火舎也】及頼口灑浄の二器に入れヨ。并て右の机の丸末等の香に和せよ【各只小分を用ゐる取ノみ。】次に杵を執りて辨事の真言を誦して香水【ニ器を加持せよ】左轉三七遍せよ。去垢なり。右轉三七遍せよ。光澤なり。】真言曰

唵　吾里々々　嚩日羅吽

即ち水の中に嗡字を觀せよ　此の字一切の不浄を燒盡せむとす。左の手に水器を取り右の手に散杖を執りて普く供物道場及行者の身上に灑し了りて之を置け。

次に軍荼利の真言を誦して杵を以て三遍・頼口器を加持せよ。真言曰

(1)「人」を朱にて右傍に正す

(3)「敬」と「鉤」との間に入るべく上欄に朱にて愛を補ふ

唵阿密哩ニ合帝。賀曩々々。吽伴吒。四オ【若し調伏の法には吉里々々縛日羅吽々々伴吒吽々伴吒を用ゐよ。】次に杵を置きて香爐を執持して啓白神分し了りて【香爐を置け】次に胡跪合掌して供養文を誦せよ。　次に唱礼　次に左方便【日中後夜は只五悔を用ゐよ。若し金剛界并に別尊の法ならば「者」。惣して只五悔を用ゐよ「ル」耳。】　次に香爐を擎て発願了りて【又之を置け。】　次に供養法　次に念誦六日五字真言一百八遍

唵阿毗羅吽欠次文殊八字真言一百八遍【法成就の為に】　唵阿毗羅吽欠

娑羅娑嚩ニ合賀　四ウ「次に本尊の真言、数遍意に任せむ耶。後に念珠を〔於〕頂上に擎げて祈願せよ。【欲樂する所に隨ふ】然して後に珠を〔於〕左の手の願指に懸けて杵を〔於〕同じ掌に持せよ。【已下更に暫くも置カ不し

（1）欲上欄に墨にて「仮」とあり

「イスト　ヌすと」。】次に閼伽供物等を〔於〕壇上の便所に轉移せ。【左方の物は左方の角に置け。右方の物は右方の角に置け。乗子等数多くアラ者、左方の者は相分に左の机に置け。右方の者は承仕先つ油并に四種の燒供ヲ〔於〕壇上ノ〔之〕後に移し置き。右の机の空所に置かむ「イカム」耶。】

先つ是れ念誦畢て即扇を以て叮鳴して、承仕を「喩る」承仕の〔之〕来るを待たず〔不〕して且つ、左方の事を辦せよ。此の間に承仕来り着きて右方の事を勤ム「イ勤む」。五オ【承仕辦事の方の燒香閼伽等を同しく便所に移し置ク「イく」。即ち同し方の右の供の〔之〕内の方なり「也」。狼藉す可からず。】行者の躬「之」。ここここここ。】行者の自から先つ香水二器を取りて】鑪の西南の角に置け。【灑浄水を以て鑪口に近つけよ　嚫口水を以て其の

（2）自」本文に入る（る）行あるによる

（3）上欄墨にて「嚫」に作る

側に置け。請(に)く西南トイハ「イ」の者は」角(こ)。是れ息災の例なり「せ」。自餘は准して知(る)ぬ可し。」壇上の小し行者の左方に當て小乳木三把、花小々相應物等を置け。「乳木は本を以て身に向(け)よ。或説云(はく)相應物は尚を本所に在け。時に至て灌浄して蓋を開(け)て之を用(ゐ)よ」「四」者へり然して而か(る)を恐ラクハ若(し)忘(れ)漏シナム。不(カシ)如。尚前に在て。便所に移し置て」「イ」ガムニハ」。」次に右の机の護摩の資具を取(り)て正(し)く己か前に當て敷列せよ。謂(は)所(る)本子・胡麻・粳米・各一杯なり「せ」。「或説には胡麻を左に置け。本子を中に安け粳米を右に在け。或説には左に本子を。中に米。右に麻を。」且に隨(ひ)て云ふ「用(ゐる)可し」。」承仕右の机の雑物を以て壇上に移し置け「イ」。」小し行者の右方に當て先つ油

(1)「油」を朱をもて正せり
(2)池点考

器を置け。其の上方に熟穀。々々の右方に飯。々々の下方に生穀・塩の杯ヲ生穀の右の側に在け。「飯三・生四・熟二・油一」。」又燒器を護摩の側に置け。行者の前の頭ニ「イに」近(く)け。「小器を以て分て入(れ)よ「イて」。時毎に之を用(ゐ)よ。本器には常に盡不「イ不」」。」豫(アラカシメ)片埦を置(き)壇上に置て大小杓を取(り)て雙て其の上に置け。」大杓は左に在け。小杓は右に在け。柄を以(て)行者の前の方に在け。ここ」。」辨列已に畢ぬ。次に結跏趺坐を作て真言曰。六ヶ「唵(オン)涅哩(ネイリ)余哩(ヨリ)致合(チエイ)底(テイ)唎(リ)毛(モウ)。」

「調伏の法の真言に曰(はく)。唵(オン)盧馱(ロダ)涅里(ネイリ)合(ガウ)瑟(シツ)嚴(ゲン)合(ガウ)矣里(イリ)合(ガウ)牛伴吽(ウバンウン)。自餘の「三」法に同(し)く前の明を用(ゐ)よ。儀軌の五種の「三」法に法毎に坐法有り。然(して)而(る)を通途に用(ゐ)

(3)「不」の傍訓「ガ」を抹消せり。
(4)朱の傍訓「ケ」を抹消せり

不る歟。」次に香水を以て供物等の上に灑浄して辦事の真言を誦して七遍加持せよ。次に小杓を以て油小し許を「イき」酌て穢器に入れよ。「更に多く為すべからず」杓を置り爰に承仕松を以て燈明の火を取りて奉マツリ了め。「件の松并に薪等は稜メ「イしめ」浄き「キ」補シて「イシイ」右の机の右邊に於て之を置け。之を物イルカセ諸す可カラ不「イす」と。」行者俾を取りて先に穢器を入れル其の凝り結セルを蠟シ洋ル然して後に松の明を「於」鑪中に入れよ。六「次に洋ける所の「之」穢を取りて油器に瀉シ「イし」入れよ。「油器穢器両つの手に、之を取れ。」即油器を「於」本所に置け。「行者の前の正中なり「也」」小杓を執りて油を酌ム更に本の穢器に入れよ三杓。「且は油をして穢り気有ら令ムむか為に且は穢をして豊足して木に福セ「イし」令ムか為の「之」故の意なり「也」」又穢器を「於」本所に置け。「同し正中なり「也」」便ち杓を以て遍く変穀飯・生穀等の上に觸れて杓を置け。「謂く各物をして穢と気有ら令むるなり「之」」次に軍荼利の真言を誦して杵を以て三七遍供物等の上を加持せよ。次に承仕薪を奉ツル行者之を取りて前に積マ積マしめム。「東北の角ノ方自り起て本を以て末を磨シ「イし」て四面に積み累ネよ。「杵」欄の形に似たり其の上に四五枝許り、相と斜ラかして並を敷け。「日」に壊れ隳トセシト「不」と欲ふ及燈供の物ヲシテ暫く彼の上に「イにて」三「在らせて微り漸に之を炫か「む」「也」」平に上に敷て三角の嵐字の形に成せ。」積み了て三遍灑浄せよ。杵を以て辦事の真言を誦して

①「故」字に「朱点材消」

②「就」の下に朱にて「火」を加へたり。

③「隨」を右傍に正せり

①「下欄「蓋」とあり。

②この字の上の「触」を朱丸にて消せり

加持せよ。「左に轉せよ」三遍。去垢なり。右に轉せよ三遍。光澤なり」次(に)扇火の真言を誦せよ三遍。即は誦し即は扇け。真言曰 唵步入嚩羅吽、次(に)右の手に二葉の花を取(り)て左の掌に入(れ)て右の手(に)鈕印に作し(て)杵を副(へ)て辨事の真言を誦せよ三遍。「加持せよ」。即合掌ノ頭ニ挿メ「壇毎に花座ノ[之]時に花を取(り)て之を加持す」「イスル」儀 之に効(せ)但此ノ壇ノ二葉ハ天ト[与]后トノ為なり「也」ゝゝ」誦曰

七・ウ「我今誓請火天上首尊天中ノ[之]大仙梵行所崇敬唯願降臨此事我護摩供即(ち)花ヲ[於]薪ノ上に投(り)て真言を誦(し)て曰。

唵 迦摩羅娑嚩合賀

次(に)請の印(を)招(き)テ右の手を以て右の腕ヲ「イを」握テ掌を外に向(け)て「イテ」禪を展(ら)て掌に入(れ)て「イテ」進一度の釣

(1)朱点「して」とあり。
(2)唵字は朱点
(3)朱点のあり
(4)朱点「ありあり」
(5)朱点「ありあり」
(6)朱の刹合の符あり
(7)下欄「解」に作る
(8)朱の喜合の符あり

の如(くして)「而」えを招け三遍。真言曰

「唵阿誐囊弊・々醯哩娑嚩合賀

「訶一寺ト與(に)招け」八・オ「次(に)四字(の)明。先(つ)降せノ三印。二手各拳に作(れ)右の腕ヲ「イを」以て左の腕の上に加(へ)よ「イヨ」。二小指を以(て)相(に)釣して「而」二頭指を舒(へ)て即(ち)口に弱ヲ唱(へ)ヨ「引せ」二頭指ヲ相ひ招て「テ」口に吽を唱(へ)ヨ「入ぬ」。二頭指交ニ「イに」交(り)て面相拄て「イテ」口に鍵ヲ「イを」唱(へ)ヨ「住ぬ」二頭指釣結シテ腕ヲ合テ「而」えを振テ「イて」口に解を唱(へ)ヨ「喜せり」想を釣印ニ「イに」由ルカ「イが」故。一切聖衆を「イヲ」招請して来て集會せ令ム。縛印に「イニ」由(る)か故。一切の聖衆を壇中に引入す「イス」。鎖印に由(る)か故。一切の聖衆を大悲本誓を以て八・ウ「各本位に竪住セシム。鈴印に由(る

か）故（なり）。一切の聖衆皆（ク）歓喜（シ）タマフ。【壇（ニ）に皆此ノ如く（す）耶（スクノミ）「イらく（のみ）」】次（に）軍荼利の真言を誦（し）て三遍・圓（に）鑪火の上に灑浮せよ。次（に）噉口器を取（り）て文殊の真言を誦（し）て之を獻ル。真言

（1）朱「に」あり
（2）聲点は朱点なり
（3）朱訓「ヲ」あり
（4）下欄墨訓「カリキニ」
（5）朱訓「ヨク」と朱点「み」とあり
（6）「相」の下朱にて「心」を補ふ
（7）朱にて「なり」と句点あり
（8）朱点「き」あり

唵（縛）羅（那）・嚩（日）羅（曩）

次（に）右の手に大杵を執（り）て更に左の手に移シテ「イて」又右の手を以て小杵を執（り）て二杵之頭・相ヒ拄ヲ。【柄ヲ握トル拳を以て胷に安け。若（し）柄知クハ「イハ」「者」（ク）状に随（フ）耳。】三々昧を観（ス）想（する）に一切の諸法ハ皆空なり。々（なる）か故に无ニ我（オ）「相」なり。々々（なる）か故に願求（する）所。无シ「亡」。又想ヲ鑪中ニ噴字有リ、字変シテ「イて」火天ト為ル。髪黄ミ、身赤シ。三目四臂（なり）右ノ手ハ光長なり。次ノ手ニハ念珠ヲ。右ノ手ニハ仙杖ヲ。次ノ手ニハ軍持。青（き）羊に騎乗シテ二ノ天女有テ花を擎（ス）「イタリ」云々。又ナニ火神相ヒ率ミテ来向スト「イすと」。又想火壇ハ即護摩壇なり。々々々ハ即（ち）火天なり。々々ハ即（ち）己身なり。々々ハ即（ち）火ロ也。三處一體なり。周遍（せ）不（ず）イフコト「イミ」无シ「イし」。一切衆生ハ皆業煩悩に従テ「イて」生スト　火日の智火九ウ「能く業煩悩障を焼く故に」解脱を得。又大日如来ハ是レ法身如来也。火天ハ是レ應身（なり）「也」能く方便に住すれば「イスルハ」是レ化身なり。【観念多少只、意樂ニ「イに」在り。】此の如く小杵に観ニ了（り）て油を酌ムテ「イて」大杵に移シ盛レテ「イれて」乃チ小杵に置テ「イテ」右の手を以て大杵を執（り）て鑪中に注ぎ瀝テヨ。【理須ク「イく」杵ノ端ヨリ之を注ルベキナリ。但油火ニモ多カラシ不ル端ヨリ「而」瀝ルニ便无ク者ハ状（に）随（て）左右（せ）「而」耶（ミ）】

（1）朱「す」と句点あり
（2）下欄墨訓「サ、ケタリ」
（3）此字の上「変字」あれど朱丸にて消せり。
（4）朱点「にし」とあり。
（5）朱点「り」とあり。
（6）朱点「せ」「り」と句点とあり。
（7）朱点「に」あり。
（8）朱点「う」あり。
（9）朱点「なり」
（10）「音字に朱にて「心」を加ふ
（11）朱訓「モし」
（12）朱訓「フ」「心」とあり
（13）朱点「ル」「て」「せ」

(1)ここまで墨点墨訓による。以下朱訓点なし

(2)「賀」字右傍に書加たり

三杓ノ冪間に[illegible]想ゑ火天ノ口従り[1]心達花に至て普く種々の供具の雲海に雨フリて十才の三寶に供養す。此の善根に依て故に十・オ「法界の一切衆生の无量の生死の悪業煩悩を焼盡して苦を抜き樂を與へ「イ迦」て清浄无漏の果を得令ム「イ」ト。云々真言曰　唵阿羯那曳賀尾耶々々々・嚩迦那野・地尾野々々々・娑嚩合賀次(に)小杓を以て又三度油を供せよ。次(に)小杓を以て熟穀を受けよ。「承仕加ヒを以て之を入(れ)よ。他の物皆之に同し」三度焼供せよ　次(に)飲次(に)生穀　次(に)塩等　次第に三杓を焼き了れ「イテ」。杓を置(き)て手を以て花を取(り)て投け焼け　又三度。次(に)三　十・ウ「部護身　次(に)不動火界の真言を誦して杵を以て五處を加持せよ。「相應物を開ト用せむか為なり」。真言曰

[1]「火」字を朱にて右傍に書き正す

(2)「勿」字を朱にて直す

(3)「四」を右傍に朱にて正す

暮莫薩嚩怛他引蘖帝藥合薩嚩目契藥合薩嚩他怛羅合吒賛拏摩賀路灑拏欠佉引叫佉引叫薩嚩尾覲閉合吽怛羅合吒憾鉗

次(に)相應物器の蓋を開(き)て灑浄せよ。観念涅槃の門を開(き)て解脱の風を扇イて世の煩悩を除(き)て　十・オ「法の清涼を致すと。次(に)十二因縁の雨を除シテ用て无明老病死等の猛熾苦聚の火を灑く云々。即(ち)招(り)、罪の印を作れ。二手金剛縛にして思願を申ス立て針の如く「イク」して進力屈して「イコト」釣形の如くせよ相ひ招(き)て想ス(ル)可し　諸ノ有情の罪及自身の三悪趣の衆の罪を「於」掌中に招くと。黒色にして雲霧衆多の鬼形の如くなり。真言曰

唵薩嚩播波・迦里灑合拏・尾戍馱曩・嚩日羅合薩怛縛合三慶

十・ウ「耶吽泮吒半音

次に摧罪の印を作れ八度内に又(ハ)て悪願之を堅て獨股杵に成せ。即ち想自身変して降三世と成る。内心に慈悲を起し外聲激勵にして真言を誦せよ。悪願三(た)い招して、諸の有情の罪を摧て「イケ」皆悪三悪の業を辭除せよ。十二・オ 真言曰

唵縛四日羅合播抳・尾薩普合吒

耶・薩縛播耶・滿馱(1)耶弥・鉢羅合讀十二・オ「訖灑合野・薩縛播耶・戰底丁反・毗樂合・薩縛薩埵縛合薩縛怛他・戎多・縛日羅合三摩耶・吽・怛羅合吒詩

先(う)天形三枚を取(り)て左の手に入(れ)て右の手の指を以て拉り折て、芥子ニ加(ハ)て(2)之ヲ投(け)よ。投け盡して「夏」後に地形三枚・人形三枚次第に此(の)如く漸こに投け焼け。「若(し)調伏り法」は此の次に麦春キ稻穀鐵末を焼け。皆色々に観ー念有り。

(1)「耶」を朱にて正せり。

(2)「く」字を朱にて右傍に正せり。

次(に)乳木一把「先きに取り「ま」置(き)る所の者也。」左の手に之を握て右の手に繞(を)解け。「其の緒を「於」後の方に弃テヨ」十二・ウ「枚ー別に之を取(り)て一々に稷に揾セサセ「イさせ」」先(う)末、後に本」一々に火に投(け)よ。「本を以(て)火中に立(つ)るに「之」想有り。」一把盡し了(り)なは。次に忍辱禅を用(ゐ)て先(う)芥子を執(り)て調伏の真言を誦して七度之を投けよ。

真言曰

吽縛日羅合件吒

次(に)増益の真言を誦(し)て粳米を焼け。又七度。真言 唵補瑟多戦・婆訶

「此の真言上念(する)所(の)事を加(へ)よ。」次(に)一息災の真言を誦して胡麻を焼け又七度。真言曰 唵扇底迦羅婆莎訶十三・オ「但此の次第は息災の法也。調伏には胡麻米芥子。自餘の三法には皆先ツ「イき」芥子。

(3)「調」字右傍に加入

(4)右傍に是なり、是ヤ汚ましか。

(1)「尊本」とあるを正す
符あり
(2)「手」の上に「至」を重ねて
符あれど
訓み不明
(3)「時」(字墨)
にて左傍にあり
(4)再記
(5)音便か

次には胡麻、次には米耳、次に丸香三度。次に末香三度。次に本尊の真言廿一遍。一説に云はく「従初の油の時より芥子に千遍誦する所の真言、遍数、定む可からず。仍て更に別に念誦せずと云々。今案ずるに須く時剋の早晩に依て以て加へ省く。須く三耳ミミミ。次に大杓供油三度、少杓を以て例の如く酌み写せ。次に小杓又三度。次に祈願、次に二葉の花を[空]合掌に挿みて火天の本位に擲よ。鑪の東南の角なり。次に灑浄して、想ふ火天等の座及行路を浄むと。次に瀬口を献し、次に四字の明、次に奉送、次に「右の手の戒禅を相捻して外に弾よ。

真言曰
阿誠曇曳・薩婆・薩婆・莫々莎賀
即想て云はく。本誓の故に。本に護摩供を受けたまふ。今

(1)「而」字左傍に朱にて消の符見え、下欄に「為」とあり
(2)「四」字の「葉」の下にあり
しかも正せり
(3)「掌」字三つのうち上を消せり
(4)「何」墨にて右傍に書入
(5)「件」を朱にて直す

は本位に還たまふと「イマヘ」。次に薪を調へよ。諸の耀を供せむか為なり「世」。須く初の如く改しめ積むへシ。然れども「而」火の勢を思ふが為なり。只一枝を以て右の方に加へ置く。若し薪き盡きなは「者」北に随て之を加へむ耳ミミ。次に去垢扇火等前の如くに火天壇を灑浄せよ。次に花三四葉を取て前の如く加持して合掌に挿て唯願諸耀加持此處。當就此座。受護摩供と誦して。十四才。即て花座を[空]火中に擲よ。若し本命耀を知らず不は「者」。作意して云へ我れは是れ凡夫也。本命耀何れの耀と知らず不耀は是を明に察たまふらむ。自ら以て應を垂れて本命耀を首と為して餘耀は件と為て座に就きて供を受けたまふと。花座の真言前の迦摩羅の呪を用よ。凡そ

餘壇の花座に同じく皆此の咒を用ゐよ。次に招請命合掌して二風二空、極て以て相ひ開け。即ち風を釣の如くして之を招け三度。真言曰

唵(1)薩(2)羅合(3)醯(4)泥(5)縛合(6)哩(7)耶(8)・鉢(9)羅合(10)鉢(11)多(12)合・而(13)瑜合(14)底(15)摩野(16)・曳(17)醯(18)四(19)娑縛合(20)賀(21)　次四字明　次灑浄　次嚩口　次大小杪

十四ウ　「各三度」状に随ひて只小杪を用ゐよ三度。次焚穀飯生穀塩花等各三度、相應物を用ゐ不。次乳木一把。次芥子等各七度、「真言

（1）「座」の上に「左」を消す

（2）下欄「法」朱にて補ふ

（3）「皆」の下に「ト」ある を寸

（4）「三」字朱にて右傍に加ふ

（5）「勿」を右傍に朱にて正す

（6）「醯」字の上「酌」あれど朱丸にて消す

（7）「薩」字に朱にて「ホ」を加ふ

（8）「鉢」の下朱にて「多合」とあり

一

并に法に随ひ次第又天壇に見たり「イタリ」以下皆之に効へ。次丸香末等各三度「大小杪以後字在」此二「イに」至て真言を誦す可し。召請の真言なり　醯四之勿曳を除く可し耳。次大小杪各三度。次祈願。次花座を「杪」鑪の東に投げよ。次灑浄座路。次嚩口。次四字明。

次奉送。「印相又天壇に同し。真言本明の末に薩事々々を加へよ。次又薪を調せよ。「同し護燈」但しを加へて左に「左」左げ。次灑浄去垢扇等。前の如く次加持花座。「必しも合掌せ不」但例の如く加持せよ。「誦曰　唯願諸宿　加持此處當莊此座　受護摩供

「即ち想ひ命宿胎宿業宿三箇の宿を首と為して餘宿は伴と為す」と不。

至て供を受けたまへと。くくく。「花座の真言同し護燈に」次招請。左の手拳を作して腰に安け。右の手劔印に作して右の腰に置け。招け三度。真言曰　唵諾之又合多羅、你那伽・曳醯四・娑縛合賀

十五ウ「次四字明。次灑浄。次嚩口。次大小杪各三度。「所一意護燈に同し」「之」。次乳木一把。次芥子等。又前に同し。次

(1)次の上墨にて「次願」を補へり
(2)又の字本にて右傍に加へたり

次に雑香、又前に同し。次に大小又前に同し。【真言又前に准せよ也】【次に前願、次に本位に花を[ヲ]鑪に投げよ西なり。次灑浄座路。(1)次四字明。次奉送、【印相又同し。燈の真言(2)又前の意に同し。】次に新を請ぜよ。【更に最初の壇の如く積ましめよ。】次に左の机の遶レル[イレる]花を灑浄せよ)便ち右の手を以て壇上の前の花の所に取り置く【前花用ト盡を内に本ー去オ「尊壇に殊に改て新を用スル[ス]意也」。】次灑浄去垢扇火等、前の如く次三房の花を取て辦事の真言を誦して杵を以て加持せよ三反。合掌に挿みて誦して曰く唯願本尊、不捨本誓、當就此座、受我微供、花を投げて迦摩羅の呪を誦せよ。【三房の花を用ふる是れ三身に約するなり】然して後に本尊の根本の印を結びて真言を誦して観念せよ。【无量壽の根本の印。外傳して二中指を(3)て合せて、蓮葉の形の如くして大呪を誦せよ[也]。不動の根本の印。内縛して二頭指を竪よ。真言は怒敵呪也。[ヲ]自餘の法に至るまでに[ヲ]テハ」且ク注(4)不【鑪中に本去ウ「尊の種子の字有り字変して本尊の形像と為る。憶鈴【已上不動尊なり】【訖哩【阿弥陀観音の法に之を用ふよ。】次に勧請の印。二手内拳にして右の頭指、釣の如くにして招きまれ。真言曰 晨夏三曼多没馱引南一阿去引呼ベ薩嚩怛羅合鉢囉合底訶諦。但他薩嚩合縛合賀引

(1)「ル」字墨にて右傍に加入
(2)「各供油」墨にて加入

次四字明。次灑浄鑪火。次に嚩口を漱れ。次に去オ「大小杓を執して主解脱門の観に入れ。火天壇の如く観を出して大小杓各供油三度。次焼供、

[1]「花」星宅に右條に書き出せり

花各六度。【初の三度は大日如来に供するなり　後の三度は本尊に供するなり　或人は七度に用ゐる　其の意を得べし。】次に相應物を開かむが為に三部并びに不動護身・火天壇の如く。次相應物各四枚。【観念前の如くに君調伏の法ならば此の次に毒春等の三種物を焼け[2]」】次に合掌して供養成就の真言を誦して曰はく。

[3]「調」を下欄に朱にて「誦」と改めたり

唵嚩日羅耶・枳里耶・欲羅耶・娑嚩賀

之ウ「又曰はく　阿可羅々々・薩嚩芵地合耶・羅布尒羅三娑嚩合賀

次に忍道禅を聚めて芥子を取れ。【三指は三観に約する也】【観念此の護摩の支分は是れ因縁の義なり【也】。過去の无明の顛倒種々の不善の因縁に依て恣に悪業を作れり。彼の因縁を以て今此の身を受け

[1]「従假」の間に音合符あり
[2]「入空」の間に音合符あり
[3]「従空」と「入假」ともに間に音合符あり
[4]「瞋」字に「下「畑」をみせけちたり

て常に三有の[1]中に生れて无量の災患有り。是れ則[2]「従」悪の因縁より悪の果報を生ずる也。今善の因縁を修するが故に无大オ「量の善根を出生して能く三業を浄めて三事を成す。謂はく所[3]降息災・降伏・増益等なり【也】。煩悩を以て薪と為し智慧を以て火と為す。此の因縁を以て行者の秘地を成就す。【云はく多少亦々意に任せむ【耳なり】。】先[1]調伏の真言を三七遍誦して芥子を投げよ。【真言火天壇に見えたり】即[2]「假従り」空に入りて見惑を断ずる[3]「観」を成せ。又[3]空従り假に入りて思惟塵沙を断ず[3]「観」を成せ。又中道第一義の无明を断ず[3]「観」を成せ。惟れは茲れ三観一心観に得[3]なり。十八ウ「芥子は是れ瞋[4]煩悩也。嗔煩悩を縁と為して諸の悪業を作す。謂はく所[3]煩悩

(1)「諸」の上「謂」をみせげちにせり
(2)「是」朱にて右傍に加入せり

は是れ能作、悪業は是れ所作なり。(2)諸の悪業を以て因と為して諸の苦果を受く。前生の悪業は「イハ」(2)是レ集諦なり。今時の悪業は是(れ)苦諦也。瞋業の諸の随煩悩等。此の観に入(り)て皆盡く焼き了(り)ぬ。次(に)増益真言三七遍を誦して粳米を投(げ)よ。【真言は前に同し。】又米は是れ貪煩悩なりと観せよ云々 次(に)息災の真言三七遍を誦して胡麻を投(げ)よ。【真言前に同し。】又胡麻は是れ癡煩悩なりと観せよ云々(3)次(に)本尊の明を誦せよ 物毎に各百八遍。但當部は一倍せよ。【息災には胡麻、調伏には芥子・増益には米也。敬受釣召。増益に准せよ 法毎に之に効へ 次第ハ火天壇に見タり。】次(に)此の三種の物を以(て)一器に混一和して更に一器に分(け)て。

(3)「次」の上「混」を朱丸にて消せり
(4)「授」字を朱にて正せり
(5)「見」朱にて右傍に書入

【一器者は當壇の新。一器は「者」諸尊壇の新なり。】其の意は煩悩を發起する二類に相ひ分シタリ「マたり」。一者、獨頭。二は「者」相應なり「也」。初には則(ち)別々に之を焼け 獨頭の三業を盡くすなり。今亦相應の煩悩を焼せむか為に而(る)を相ひ和して之を用(ゐ)よ。耳(まこ)のみ 次(に)百八の大乳木を取(り)て前に置(き)て解(き)て緒を結ヒ後の方に於テ香水を以て灑浄せよ。先つ三十六枚を執(り)て部主尊を念礼せよ 次(に)部母を礼せよ 次(に)本尊を礼せよ。即(ち)(3)啓白して云(はく)唯願本尊及諸聖衆加助衛護と。然して後に三十六枚に一々に穀に塩(ち)させ。【廿六枚は欲界の下の四諦の惑に約する也。即(ち)是れ苦に十、集に七。滅に七。道に八。并に貪瞋癡慢等の惑に各一是なり「也」。】次(に)三種の和合物を焼け。又乳木三十六

(1)「者」字を上欄に朱にて改めたり
(2)「啓」の上の「敬」をみせけちにせり

枚。【色界の下の惑欲界に准ず可し。】次(に)和合物、又乳木三十六 三才 枚、【色界の下の惑充(し)色界に知る可し】次(に)三種の物【已上真言遍数意に任す。但し護摩物一一念じた真言一遍せよ。乳木に至ては此の限に在(ら)ず。抑此の壇の護摩物ノ、遍数之外に尚其の餘有る可く者。器ノ作り之を執(り)て空器に傾け入(れ)て右の机に之を置り。】乳木を用ゐるに三段の「又」意在り。又煩悩業苦の三道及底一安執 細一安執 底細安執の三法等に約する也。次(に)延命の印明を以て底妻草七枚を焼け。二手拳に作(り)て二目相い釣して掌を仰けよ。真言曰

唵嚩日羅二合欲。【吉(し)延命(え)を為(す)に非ずは必(ず)しも為(す)べからず】次佛眼印 三才・ウ 「二手内縛して二中指申ゑ竪て頭の相柱(し)て二頭指之を開(き)て中指の背に加(へ)て一麦許相ひ至(す)こと勿れ。真言曰 唵沒馱魯沙毘・娑縛二合賀。次(に)九香等の香、各六度、次大小杓各六度。【雑香及大小杓の「又」間に真言を誦せ不。】次(に)杓を置して祈願せよ。次(に)三摩の「イノ」花座を「於」壇の正中に投(げ)よ。次灑浄座路。次願口・次四字明・次奉送り合掌して誦して曰(はく)

現在諸如来 救世諸菩薩 不断大乗教 三才 到殊勝位者 唯願聖天衆 決定證知我 各當随所安 後時重哀赴

即(ち)勧請の印を作(り)て本明の末に薬事々々の句を誦せよ。【子】娑嚩賀の字の聲と三たび外ー弾せよ。次(に)薪を調(せ)よ。【本尊壇の如くに名(し)薪盡き利者(は)。亦狀に隨(ば)む耳。】次灑浄去垢扇火等、次(に)数一束の花

(1)「誦曰唵願諸尊加持此虔當就此座受護摩供の八字墨にて加入

座を撃て(1)呪を誦せよ。例の如く。次招請【本尊の印を用(ゐ)て【命】之を招け。】

唵 阿婆囉・戌醯 叫婆囉賀・【三部の諸尊を召ス。「請せむ」明なり。【也】】次四字明・次灑浄・次願口・次大小杓各三度・次焼供各三度・次小乳木四把・【三把は三部ノ部毎に一把。一把は真言教法、并に行者の滅業の為なり【也】。】次和合茅子・【前用之外か一器之を用ゐよ。此の壇遺餘は普世天壇の新に(2)充ツベシ可し。】

(2)「先」を朱にて正す。

(3)「輪」の上の「輪輪」二字をみせげちとせり

真言曰 唵 阿婆囉・婆囉賀・次(に)若(1)随意の尊有らは其の真言を加ゑ誦す可し。次仏眼真言七遍。【印相前の如し。】次(に)三部の界會、及随意の諸尊を縁して小祈願。次(に)小杓を以(て)供油三度。二ヲ「次(に)滅悪趣の印を作れ右の手五(3)輪を舒ゑて耳の際たに擧(げ)て五指の末を以(て)背一方(に)印せよ。左の手拳に作(り)て腰に安(き)て真言を誦せよ七遍。(1)曩莫三麼多没駄喃・特哥婆那・阿毗度合駄羅尼・婆怛婆合駄敦婆囉合賀次(に)招罪の印真言、次(に)擯罪の印真言、【已上印明観想火天壇の相應物の所に在り。】次丸末等の香・次(に)花座を投(げ)よ。【遺れる所の花を以て東北の角自り鑪の四邊に普散ス【之】。】次灑浄座路・次ニヲ「願口」次(に)四字の明、次奉送、【勧請の印を以て外一弾せよ。又本明の末に薩車薩車を加(へ)よ 例なり【也】。】次(に)新を調(せ)よ。【諸尊壇の薪盡き材者、只一二枝を以て之に加(へ)よ。】次(に)承仕をして諸尊壇の焼供三種并に塩与護摩の三種の物を皆以て一器に混雑して更に又丸末香等を以て和入せ令む【イシム】【日中一時には者】火壇の飯餅菓子等、物の毎に小々和合ス】

(1)「曩莫」を「日」をみせげちとせり

(2)「日」を朱にて「八」を補ひて正せり

即(ち)其の甘露須弥王等の真言を誦して加持せよ。先づ右の手を指を舒(へ)て之を仰(き)て右轉せよ三遍。真言

(1)翠げち

曰　唵(1)嚩迷(2)嚩・嚩嚩(3)婆波耶(4)・

(2)「叩」げち

(3)「素」オ

素嚩々々波羅素(3)叩嚩・々々々々・娑婆訶

又印を結ぶ之を霊覆を加持せよ三遍。真言曰

南謨嚩嚩婆耶・怛多誐多耶・唵嚩嚩々々・婆羅素嚩・々々々々・娑婆訶。

右の手の空風相ひ捻して、彈指せよ三遍。真言曰　南謨三曼哆没馱南・縛嚩(1)枳帝(2)・三嚩羅々々々・吽

(3)「諸」字朱にて右傍に書入

(4)「嚩」げち

(1)「有次第云不動油三水杓飲食三小杓餘天等以一杓淡之三度の行器にて行道にあり。」

(2)「歓」の上「勧」をみせげちにせり

(3)「方」げち

三ウ「次灑浄去垢扇火等。次(に)花座を擎(て)て誦して曰(は)く唯願(3)諸天・加持此處・當就此座・受護摩供・之を投けて迦麼羅の呪を誦せよ例の如く。次招請合掌して二大指之を立て風を以て之を招け三遍。真言　唵(1)嚩

迦々々・誐羅耶・曳醯四・娑縛賀

次(に)四字の明。次灑浄・次嚩口、次(に)小杓を以(て)供油三度。次(に)同杓を以て惣一合の物を焼け三度。真言曰

三ウ「唵嚩迦々々・誐羅耶・娑縛賀

(1)次(に)中臺に四辟の不動明王を焼供(せよ)。【別呪充し慈救の呪を誦せよ。】想を青肉色(なり)と(せ)。二手金剛拳にして頭指小指各曲メて鈎形の如(く)して口の兩の邊角に安け。牙の如く。右の手に刀を持て竪て令(め)よ。左には索を持(て)て半跏坐して右左を押せ。盤石の上に坐して威焔光明。身に遍せるコト火の如(く)し。

次(に)十方世天并に歓(2)喜天・及随意の神祇等・各一杓東方帝尺の真言に

三ウ「曰。印　娜羅野・娑嚩(3)合賀。

【上に帰命の句を加(へ)よ　餘は皆此に准(せ)よ(之)】東方(3)南方の火天の真言に曰(はく)。

(1)「阿」字「訶」をみせげち

(2)「焰」の上「炤」を朱丸にて消せり

(3)上欄「若可有花敷」

(4)「才」上とあるを正す

(5)「天」は墨にて補入

阿(1)誠那(2)合曳・娑縛(3)合賀

南方焰摩天真言曰

(3)焰摩世・娑縛(4)合賀

西南方羅刹主天真言曰

乃里(5)合底曳・娑縛賀・

西方水天真言曰 唵縛嚕野・娑縛賀

三五オ「西北方風天真言曰 縛野欲・

娑縛賀・北方毗沙門天真言曰 吹室

羅(6)合 縛拏野・娑縛(7)合賀

東北方の大自在天【舊には摩醯首羅

と云ふ。文には伊舎那天と云ふ。】

真言曰伊舎那野・娑縛(8)合賀・

(9)上方の梵天真言曰

没羅(10)合含摩(11)合寧・娑縛(12)合賀

下方地天の真言曰

三五ウ「畢哩(13)合體(14)嚩(15)也・(16)合娑縛(17)合

賀

内の巽の方の日天の真言に曰(はく)。

阿你(18)怛(19)夜(20)合野・娑縛(21)合賀・

内の坤(22)ノ方の月天真言曰

(1)「所」字「一」の上にあるをみせげち

(2)「爲」を見せけちとし上欄に「爲」に作る

(3)上欄「姿」本と墨にあり

戰捺羅(23)合野・娑縛賀

歓喜天【方位无し 但し曼荼羅の位を

想(24)て供養すべし】「耳」。【真言曰

唵 告哩(25)合虎(26)・娑縛(27)合賀・

山王三聖當所護法。(28)「一切の神祇・一

切の三六オ「靈界・一切有情觀念し

て十方世天自(29)始(30)て乃至盡虛空餘

界の有情苦を抜き樂を與ふ微妙の

壯嚴供具・飲食衣服・周く飽滿せ不

(31)イフシと莫(32)シテ「イし」。皆五分法

身を得て同(33)く无爲(34)の樂に入る。云々

(35)次(36)ナニ天・若(37)は請ず八宿

の真言を誦して大杓を以(38)て供洒せよ。

【多少有を以て限りと為す。】請ず

八宿真言曰 唵阿上惹(39)吒・(40)合尾(41)孚

(42)合設(43)底(44)嚩・諾(45)乞(46)察(47)合怛羅(48)合毗藥

(49)合・你(50)寧逸(51)反曩(52)去曳

(53)橘(54)計叶惹(55)・娑縛(56)合賀【十二天の惣

真言前に在り。】次(57)ナニ因縁の觀。

无明縁行々縁識々縁名色々々縁六入

々々緣觸々緣受々緣愛々緣取々緣有々緣生々緣老死憂悲苦惱滅明滅則行滅々々則識滅々々則名色滅々々々則六入滅々々々則觸滅々々則受滅々々則愛滅々々則取滅々々則ニテヒオ「有滅々々則生滅々々則老死憂悲苦惱滅（以下「まで」みせけち）次灑淨座路　次嚩日次四字明　次奉送【印相火天耀宿三壇に同し　真言は惣じて末に薬車々々を加（へ）よ。】」

次（に）法身の偈并に種々の文を念（じ）たまふ意に任す。　諸法從緣生如來說是因是法緣及盡　是大沙門說知苦斷集證滅修道　一切衆生・凡有心者・悉皆當得・阿耨菩提・是（の）如（く）觀し了（り）て又懺ニテヒウ「謝して曰（は）く

所（イ）設供具　多不如法可咲鹿悪惚乱聖衆　普施歡喜　懺悔し了（り）て。（ロ）次花座【手を以て薬々に分ち椅ムて、虛空に擲け散らせ　處として至ラ

（イ）「設」をけちして右傍に墨にて正す
（ロ）次祈願左傍に補入

ミメすと「不」イフこと勿れ「也」】

次灑淨・次嚩日・次四字明・次奉送【印相火天耀宿三壇の真言に同し　薬車々々を加（へ）よ。】次（に）承仕筭を奉て之を執（り）て鑪を掃ー治せよ。然（し）て然に筭を反て鈴自（り）始（め）て「宇」開伽供物等に至（るま）て元の如く布ニテヘオ「列せよ。即灑淨・次三部護身、次（に）本尊根本の印を結（ひ）て本尊三昧耶に入れ。【本尊の真言を誦せよ多ー少意に任す。】　次（に）金剛輪の印。二手合掌して各少指无名指相叉（へ）て、内に入（れ）て二中指を以（て）風指の背に激（ふ）へ二母指食ー指の側に並ー立（て）よ。真言曰　那莫ニ婆底鉢ニ合也・伊尾迦引雞・去薩羅縛怛他薬多難闍尾羅・而尾羅布・摩訶作訖羅ニ合・縛日里ニヘウ「薩多々々・婆羅帝・々々々・但羅以・々々々・尾拖弃寧・三併者寧・多羅弃寧・悉拖伊鉢・

但薩・莎訶

次(に)杵を[不]本所に置(き)て祈願せよ。

次(に)念珠を[於]焼香の[1]鑪に薫して[而]頂に擎(げ)て之を拝して本所に置け。次又三部護身・次示三昧耶・次五供養　次普供養　次又所設供具の懺悔。次又小祈願。次四智讃[2]。次振鈴　まんオ　次加持印。[3]堅寶合掌して左轉せよ三遍。右轉せよ三遍。真言曰

曩莫三滿多没馱喃一引薩縛他・二勝ゞ但陵参々々合顚ゞ四達摩ニ々

[5]婆他二合婆野々々合々々没馱薩底也二合縛六達摩薩底也二合縛七僧伽薩底也二合縛八婆縛加縛九吽々吠娜尾泥婆縛二合賀引

三九ウ　次廻向方便次(に)磬を打て香爐を執(り)て廻向。　次解界・次三部三昧耶

焼供護摩等の間に、火(を)散テ吾(し)来リテ[イて]身一體の衣服を焼が者は。馬頭明王の真言を[1]誦して吽泮吒の句を加(へ)て　之を投け焼け。真言曰

唵阿蜜栗二合妬・納婆二合縛・吽泮吒・婆縛二合賀引

一塗壇事【壇様別式に在り。】

三オ　鍬(を)持て地を掘る[2]時の印。金剛縛して禅智進力を竪て之を並(へ)よ。

真言曰　唵[4]法那嚩禅提・婆嚩合訶【サ一遍之を誦せよ。】泥及置摩

[3]尤塗香等を加持する時の印。二手合掌して進力戒方の二の節を屈して相合(し)て禅智並竪で進力を去(け)て(ま)ま口形の如(く)せよ。真言曰　唵阿蜜哩二合都・娜婆二合縛・吽頗吒・婆嚩二合賀引サ一遍

今の人、生気の土を用(ゐ)る。

三ウ　一五色の線・【之を[5]曳用(ゐ)る。作法、并に真言辦事の所に在り。】長三丈五尺、白を以(て)心に為して自餘

[1]謂を朱たて正せり。

[2]「式」を下た改む

[3]「戒」をみせけちたし上欄に正せり。

[4]朱傍訓れど不明「二字」

の四色は、相ひ謹ふて外に在り　未
嫁ノ（イの）女をして之を作さし令よ（イ作）。
一搦杓　注杓ホ闊。狹。は四指の量に。
深さ一指の量に。中に三股杵を作れ
鹿（トサ）足ヌ（イぬ）
一把に長は一時の量に、寫杓小口の
旋（メリ）一指の量に深さ云々。
一香水二種并器等
白檀麝金龍脳を擣セ。金銀熬鋼白況
三三・オ「商佉並（ム）に用（ゐ）よ。（ヲ）
一乳木　息災甘木。增益果木。調
伏苦木。釣召刺木。敬愛花木。長（ヒ）
擽手。亦ナ指、亦四指。鹿（トサ）さ（イと）頭一
指の量の如く上みは細（ホソ）ク下は太ク
せよ。今長七八才許。一把、百八の枝。
八把各七枚、
一雜香　白檀茅香沈香丁子薫陸龍
脳豆（ヒン）蔻（ヲ）は煎香、蘇合芥子、已上十
種半丸半末せよ。
三三・ウ「一雜花　息災白花。增益は說か

（1）「足」の上「之」を墨丸にて消せり。
（2）「の」の字もあり
（3）「一」を朱丸にて消せり
（4）「納」を朱にて正せり。
（5）「蔻」を朱にて墨にて改む。

不。調伏鳧花。若（ム）香（ヒ）花。釣
召（ヲ）花刺（ヒ）花赤敬愛赤色。
一相應物　三類【天形は鳥。地形
は狐。人形五種の護摩に通用す可し。】
屋蔞草【延命之時に之を用（ゐ）よ。】
毒春【諸の毒藥を以て春（ツキ）糅（メリ）可
し。今は付子阿世美等を用（ゐ）よ。【之】】
稻穀【謂ク麁（ソ）糠なり【也】。已上三種は
調伏の法に之を用（ゐ）よ。想魔火天の
口從（リ）器（ヲ）仗を流出すと】
一座法　息災北面吉祥、【左ノ脚を竪
て膝右は左を押せ慈心與之を相應せよ
（リ）】增益東面。金跏・調伏南面・蹲
居　三三・オ「座、釣召仰きて（イキ）諸方
を見よ　半跏座。敬愛西面、賢座、【
物に踞りて脚を垂れよ。】今惣て跏
趺座を用（ゐ）よ。【息災調伏座の眞言
辨事（ヲ）の所に在り。】
一衣色　息災白、增益黃。調伏黑。
釣召赤。愛敬釣召に同し。

（1）「有」字かゝみせり。
（2）「下」朱にて「花」とあり
（3）「新」を朱にて改めたり。
（4）「伏」を朱にて「仗」に改めたり
（5）「所事」の誤。序を正せり。

一反飯供物等事　三分に分(て)て【一分は寺中の衆、一分は乞匂、一分は水陸有情】行者及僮・絲敢(へて)之を用す可(から)不。

三三・ウ「破檀事

期日満て已て聖衆を奉送して【三】更に座に就て杵を以(て)壊ぶれ檀・土を掘し。真言曰

曳達摩儞・都・鉢羅婆縛引儞・都・婆底合苦・他怛誐覩・紇野・縛・娜・帝・鎗・左寅引・顎・嚕・馱・瞪・鍐・縛引・弥・泥以反摩迦・室羅摩娜・調

三三・オ「奄倶盧那喃悉、觸穢所可誦呪

長元八年四月十二日書

(朱)

(1)「一分水陸有情」六字なし。

(2)「已満」を正しく「満已」とせり。

(3)「鉢」の作りを朱にて正せり。

二、解　説

「護摩蜜記」は護摩の作法とその折誦する呪文について説かれたもので、「護摩私記」「護摩次第」といわれているものと同じ類のものである。ここに訓読文の原となった奈良西大寺所蔵にかゝる一本は全一帖、平安末の書写に成ると認められるもので、現存の空海述のもの、円珍述といわれるものとは又異なった内容のものと見られる。

本書は去る昭和廿八年夏、奈良探訪の折、西大寺の経蔵において、中田祝夫先生、築島裕氏の発見なされたものである。粘葉装の縦十五糎、横二十糎の小本で、一行十四字、八行を一頁の天地および行間に施された白界中に書写し、また行中に双行に記した註も多く見られる。楮紙廿五枚を用い、内題に「護摩蜜記」と記されてある。外題にも同名があるが表紙は後人の手によってつけられたものであると見られる。所々に蟲損があ

るが読解にはさして影響はない。

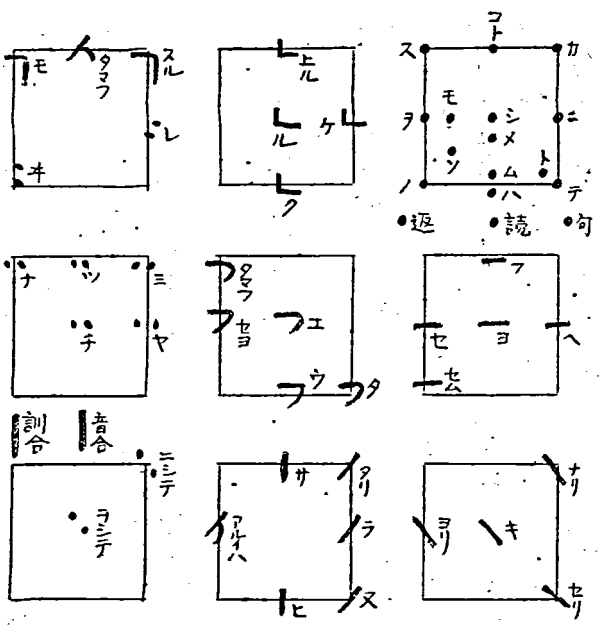
本文は三十四枚目表一行目まで同一の筆であって、それに朱にてヲコト点・仮名点・聲点および濁点を施し、また本文の文字を校し（別に墨（二筆ある）によって仮名の訓を加え、また本文を校合している。朱筆については終りの識語に

長元八年四月十二日書〕

とあるによれば、後一條天皇の長元八年（1035）に加えられたことが明らかである。本文もほぼ同じ頃のものか。墨訓はやゝ後かと思われるが仮名字体より見てあまり下らない時のものであろう。最後の丁（廿五・ウラ）には本文と同筆でやゝ大きく「護摩私記」と書かれている。「長元」の識語とこれとの間一丁半には後筆による梵文が記されている。

この訓読文は朱訓・朱点によった、それは全文一筆にして明瞭・精密かつ極めて正確に加えられ、小冊子中に傍訓語彙も比較的豊富で全文訓み下し可能である。そのために復原された文章は、すでに国文であり、當時の第一資料として仮名遣・語彙・語法および音韻などの研究の対象となり、また漢文訓読史の調査の好資料ともなるのである。

ヲコト点は寶幢院点系統のものであるが、点図集所載のそれとは一致しないものがある。帰納したものを仮名字体表と共に掲げておく。



仮名字体表

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ん	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	ヰ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
		リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		ル		ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
置符	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
置符		レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
ゝ゛	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
ゝ゛	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

訓読文作成に當っては、ヲコト点は平仮名で、仮名点は現行の片仮名で示したことは、はじめに述べたとおりである。たゞ「He」についてはヲコト点は「ㄷ」で、仮名点のは「へ」でありわした。本文中ヲコト点と傍訓がダブリ、また二様の訓法を持つものがまゝあるが、これらは「イ　」として示した。聲点については、原点は朱点「・」もあるが、便宜上「。」としてありわした。句點と読点とは正確に復原することをはかったが、原文において嚴密に使い分けられていない。このことは音合と訓合の符の使い分けについてもいいうる。

この訓読文は朱点によったものであるが、たゞし、七丁表の後半より九丁裏の後半に至る約二枚半は、朱点がなく、それに代って墨のヲコト点（こゝのみ）があるので、それによって訓んだ。

（以上）

〔一九五四年二月廿日〕